日本体育協会・日本オリンピック委員会 100 年史（全 3 分冊）

PART1 特集 2 歴代会長の足跡 第 2 代会長 岸清一氏に係る記載内容の事実確認について

2012 年 3 月に発行した標記周年記念誌の記載について、事実ではないフィクションが含まれている可能性がある旨、ご指摘をいただきました。岸清一第 2 代会長に係る記載は、100 周年記念誌編纂当時、古城庸夫氏が執筆された WEB 上に掲載のブログ記事（のちに書籍化^{※1}）などを参照して執筆したものです。このご指摘を受けて、「岸清一伝（岸同門会 編）」、日本スポーツ協会の組織の歴史を記載した「大日本体育協会史（大日本体育協会 著）」、「日本体育協会五十年史（日本体育協会著）」、「日本体育協会七十五年史（日本体育協会著）」を再確認したところ、事実とは言えない記述が含まれていることを確認いたしました。

つきましては以下のとおり、参照資料を基に行った事実確認の結果をお示しいたします。この度は事実確認が不足していたこととあわせて、引用元のブログ記事を執筆された古城氏に多大なるご迷惑をおかけしましたことにお詫び申し上げますとともに、今後は同様の事態を招かないよう、事実確認を適切に行ってまいります。

※1) 古城庸夫著（2023 年）『ローイング・フォー・ピース—近代スポーツの父・岸清一の生涯』

*史実をもとに著者が創作した伝記小説

< 事実確認の結果 >

No	100 年誌記載内容 (48～49 ページを転記)	[参照] 岸清一伝、大日本体育協会史、日本体育協会五十年史、日本体育協会七十五年史における記載状況	事実か否か確認ができなかった事項	[参照] 古城氏著書の記載箇所 ※一部著書創作内容含
1.	生涯を日本のスポーツに捧げた 気骨のある人だった。 (中略) 御茶ノ水の土地は日立製作所に 25 億円で売却され、それで現在の	左記の内容は、記載があり。	なし。	

No	100年誌記載内容 (48～49ページを転記)	[参照] 岸清一伝、大日本体育協会史、日本体育協会五十年史、日本体育協会七十五年史における記載状況	事実か否か確認が できなかった事項	[参照] 古城氏著書の記載箇所 ※一部著書創作内容含
	ビルを建設し、残った資金10億円を基本財産に繰り入れた。			
2.	37歳の時に国際弁護士として米国に視察旅行をしたことがスポーツ界と関わる転機となる。ちょうど、渡米した年に1904(明治37)年第3回セントルイスオリンピック大会が開かれていたため、いくつかの競技を見て回った。	37歳の時に渡米したことは、記載あり。	第3回大会を視察したこと。同大会において「いくつかの競技を見て回った」こと。	若槻禮次郎氏から第3回大会の視察指示を受けた、と記載あり。(P175)
3.	そして、クーベルタン男爵の「スポーツこそが規律を重んじ、心身ともに優れた若者を育成できる」の考え方に同調、さらに1908(明治41)年に初めてクーベルタン男爵と会ったに時にオリンピックの世界平和に貢献する精神を説かれ、「スポーツと平和」思想を徹底的に叩き込まれて心を動かされた。 ※下線部は原文ママ	記載なし。	左記の記載事項のすべて。	1908年第4回ロンドンオリンピック大会の際にクーベルタン男爵訪ねてきて面会したこと、オリンピックの世界平和に貢献する精神に賛同し、ヨーロッパと同じようにアジアに急速に巻き起こってきた戦雲を何とか鎮めるためにも、アジア初の参加を日本国に果たしてほしいと話をされた、と記載あり。(P177-181)

No	100年誌記載内容 (48～49ページを転記)	[参照] 岸清一伝、大日本体育協会史、日本体育協会五十年史、日本体育協会七十五年史における記載状況	事実か否か確認ができなかった事項	[参照] 古城氏著書の記載箇所 ※一部著書創作内容含
4.	嘉納会長と初めて顔を合わせたのもこの時期だ。1912（明治45）年第5回ストックホルムオリンピック大会への日本初参加に向けて嘉納会長らと共に動き回って汗を流し、そして実現させた。	創立当初から、岸清一氏が当協会に関わってくださったことは、記載あり。	なし。	1912年第5回大会参加に向けて対応したことの記載あり。(P182-185)
5.	1919（大正8）年、大日本体育協会の理事に就任。弁護士業の忙しさもあったが、東大予備門時代から夢中になっていたボート競技のオリンピック大会参加実現に向けてまい進した。ボート競技のオリンピック大会参加は、1928（昭和3）年アムステルダム大会で実現する。	岸清一氏の大日本体育協会理事就任の記載、東大予備門時代から漕艇を行ってきたことや日本漕艇協会の初代会長に就任する等、ボート競技の普及・強化に力を入れていたことは、記載あり。	なし。	大日本体育協会理事就任（P194）、ボート競技の1928年アムステルダム大会参加実現に向けて取り組み、実現したことの記載あり。(P224)
6.	1921（大正10）年、嘉納会長の千葉県我孫子の別荘に呼ばれ、いきなり「大日本体育協会をよろしく頼む。スポーツの力で日本の若	記載なし。	左記の記載内容のすべて。	100年誌記載内容6の引用箇所あり。(P199-202)

No	100年誌記載内容 (48～49ページを転記)	[参照] 岸清一伝、大日本体育協会史、日本体育協会五十年史、日本体育協会七十五年史における記載状況	事実か否か確認が できなかった事項	[参照] 古城氏著書の記載箇所 ※一部著書創作内容含
	者を救ってくれ。そして、オリンピックを東京で開いてほしい」。岸に断る理由はなかった。			
7.	54歳の若さで第2代会長に就任。日本の近代スポーツが夜明けを迎えることになる。	54歳で第2代会長に就任したことは、記載があり。	なし。	100年誌記載内容7に関わる記載あり。(P202-203)
8.	嘉納会長は岸の幅広い知識、スポーツをこよなく愛する情熱、アジアをはじめ世界各国との関係を重視する感覚などを以前から評価、自分の後継には「岸博士しかない」と決めていた。嘉納会長が岸に向かって深々と頭を下げて会長就任を頼んだ光景は後の総理大臣となる若槻禮次郎ら複数の目撃者がいる。	嘉納治五郎初代会長が岸清一氏を第2代会長に推薦したことは、記載あり。 推薦に際し嘉納初代会長は、「余は体育協会会長の資格について理想を持っている。第一に会長はスポーツに興味を持ち理解していること、第二にスポーツのために自己の時間を持っていること、すなわち競技大会や会合に際して随意に出席しうる余裕がなければならない。第三には相当に資材を有すること、第四に人物でありかつ社会的に相当の閱歴のあること等である。以上の諸点より考え、岸清	嘉納治五郎初代会長が、岸清一氏に“深々と頭を下げて”会長就任を頼んだこと、その光景を若槻禮次郎氏ら複数の者が目撃していたこと。	嘉納治五郎初代会長が岸清一氏に“深々と頭を下げて”大日本体育協会を頼むと伝えたこと、その場に若槻禮次郎氏らが同席していたことの記載あり。(P202)

No	100年誌記載内容 (48～49ページを転記)	[参照] 岸清一伝、大日本体育協会史、日本体育協会五十年史、日本体育協会七十五年史における記載状況	事実か否か確認が できなかった事項	[参照] 古城氏著書の記載箇所 ※一部著書創作内容含
		一博士はいずれの条件をも具備する好個の人物であるから余は新会長として衷心から推薦した訳である」と述べています。		
9.	最初の仕事は、会長就任の年に上海で開かれる極東選手権競技大会への選手派遣だった。 (中略) 1927(昭和2)年3月、長年世界的な体育振興に貢献したとしてフランス大統領より、レジョン・ドヌール勲章を授与されるなど、スポーツ界での地位を高めていった。	左記の内容は、記載があり。	なし。	岸清一氏が会長就任後、最初に解決することとして第4回極東選手権競技大会に関する対応の記載あり。(P203)
10.	同時期、嘉納名誉会長との約束である東京オリンピック招致に全身全霊を掛けて臨むことになる。	記載なし。	左記の記載内容のすべて。	嘉納会長から日本でオリンピック開催することを頼まれた記載あり。(P202)
11.	1932(昭和7)年、ロサンゼルスオリンピック大会に向かうため、横浜港を出港した龍田丸の船	左記の3名が龍田丸に乗船していたことは、記載があり。	会談・相談を行ったこと。	1932年ロサンゼルスオリンピックに向け、龍田丸に嘉納名誉会長、岸清一会長、平沼亮三日本選手団

No	100年誌記載内容 (48～49ページを転記)	[参照] 岸清一伝、大日本体育協会史、日本体育協会五十年史、日本体育協会七十五年史における記載状況	事実か否か確認ができなかった事項	[参照] 古城氏著書の記載箇所 ※一部著書創作内容含
	上で、嘉納名誉会長、平沼亮三日本選手団長を交え、3人による会談が持たれた。オリンピック東京招致をアピールするため、ロサンゼルス市内でIOC役員らを招いての晩餐会を開く相談である。			長らが乗船したことの記載あり。(P241) 嘉納名誉会長と岸清一会長との間で、日本でのオリンピック開催のために、アメリカで開催されるIOC委員との懇談パーティーを成功させることに関する話の記載あり。(P246-247)
12.	岸は自分の懐からパーティー費を賄うと言い出した。嘉納名誉会長は「岸君、いつも金銭的なことで苦勞を掛けてすまん」。岸は「スポーツ振興に身を捧げた以上、子孫に美田を残すつもりはありません」と答えた。	1932年のロサンゼルスオリンピック大会の際に、岸清一氏が同大会組織委員会委員を招待し宴席を設けたことは、写真あり。同席には、後のIOC会長のエドストロム氏（スウェーデン）などが出席。 当時の当協会の財政は非常に難しい状況にあり、岸氏の手腕に頼る面が相当あったことは、記載あり。	左記のような嘉納名誉会長と岸氏の会話があったこと。	100年誌記載内容12の引用箇所あり。(P246)

No	100年誌記載内容 (48～49ページを転記)	[参照] 岸清一伝、大日本体育協会史、日本体育協会五十年史、日本体育協会七十五年史における記載状況	事実か否か確認が できなかった事項	[参照] 古城氏著書の記載箇所 ※一部著書創作内容含
13.	1940(昭和15)年の第12回オリンピック大会。「皇紀2600年を祝すこの年に東京で一大行事を」…これが日本のスポーツ界だけでなく、国民の夢だった。	左記の内容は、記載があり。しかし、「国民の夢」であった点は各種資料からの推察。	なし。	皇紀2600年を祝す一大行事の一つとして東京オリンピック招致することの記載あり。(P246)
14.	嘉納名誉会長はロサンゼルス空の下で岸に「東京大会が成功すれば戦争回避につながり、世界平和が訪れる」と語りかけた。岸も同じ気持ちだった。	左記のような内容の直接の記載なし。 嘉納名誉会長が、1940年の第12回オリンピック大会を東京で開催することは、戦争回避に繋がると考えていたことは、各種資料から読み解くことが可。	左記のような嘉納名誉会長と岸氏の会話があったこと。	100年誌記載内容14の引用箇所あり。(P246)
15.	パーティーは盛り上がり、東京オリンピック招致を十分にアピールできた。ロサンゼルスオリンピック大会での日本選手の活躍もあり、世論にも後押しされて「招	ロサンゼルス大会で日本選手が活躍したことは、記載があり。	パーティーが盛り上がり、東京オリンピック招致を十分にアピールできたこと、世論にも後押しされた「招致」は一気に現実味を帯びてきたこと。	明確な記載なし。

No	100年誌記載内容 (48～49ページを転記)	[参照] 岸清一伝、大日本体育協会史、日本体育協会五十年史、日本体育協会七十五年史における記載状況	事実か否か確認が できなかった事項	[参照] 古城氏著書の記載箇所 ※一部著書創作内容含
	致」は一気に現実味を帯びてきた。			
16.	岸は東京オリンピック招致について、決して楽観はしていなかった。大会開催に使われる国家予算があまりにも膨大過ぎるし、必ず軍からの反対意見が出てくると感じていた。	記載なし。	岸清一氏が、左記のように感じていたこと。	若槻氏から先の新聞における岸会長の談話が軍部を刺激するような感じを受けるため、発言に気をつけるようにとアドバイスをした記載あり。(P252)
17.	東京オリンピック招致はIOC総会で決定したが、第2次世界大戦勃発のため、結局は中止となった。その夢は24年後の1964(昭和39)年に実現する。	記載あり。	なし。	東京オリンピック開催決定の記載あり。(P272)
18.	「近代スポーツの父」と呼ばれるのにふさわしい岸の生涯だった。世界のスポーツ界に「ドクトル・キシ」の名が謳われ、誰からも愛された。	岸清一氏が「近代スポーツの父」と呼ばれたことは、記載あり。 岸清一氏のご功績から、世界のスポーツ界に名が謳われ、愛されたことが推察できるが、そのような直接の記載なし。	なし。	ドクトル・キシの記載あり。(P217)

No	100年誌記載内容 (48～49ページを転記)	[参照] 岸清一伝、大日本体育協会史、日本体育協会五十年史、日本体育協会七十五年史における記載状況	事実か否か確認が できなかった事項	[参照] 古城氏著書の記載箇所 ※一部著書創作内容含
19.	1933（昭和8）年10月29日、あれほど健康に気を付けていた岸会長は急激な喘息の発作を起こし、東京市芝区伊皿子町の自邸で波乱に満ちた67年の生涯を閉じた。	左記の内容は、記載あり。	なし。	100年誌記載内容19に関わる記載あり。(P255)
20.	同郷の友人で共に東大ボート部で活躍した当時民政党総裁の若槻禮次郎は「あまりに早すぎるぞ。まだやることは山ほどある。お前の代わりは誰もおらん」と涙に暮れた。	記載なし。	若槻禮次郎氏が、左記のような発言をしたこと。	100年誌記載内容20の引用箇所あり。(P257)
21.	志半ばで逝ってしまい、最期の言葉は「参った」だったと伝えられている。	左記の内容は、記載あり。	なし。	100年誌記載内容21の引用箇所あり。(P258)